

佳作

私の心

茨城県 日立市立豊浦小学校六年 吉田 稟椏

四月六日、遂に六年生になりました。今日からまた新しいクラスになる。今年は修学旅行もある。凄く、本当に物凄く楽しみにしている。仲良しのみんなと同じクラスだといいなあ。誰と一緒にかな。期待と不安に胸を膨らませながら登校しました。ドキドキしながら昇降口へ行くと、もう既に人だかりが出来ていました。「みんなクラス表を見てるんだ。私も見たいー」と思い、走って扉の前に行き、自分の名前を探しました。「やったー」「一緒だね」「イェーイ」。そんな声を聞きながら私は悲しさでいっぱいでした。頭が真っ白になり、体から血の気が引き、胸がズキズキと痛み、みんなの声が段々と遠くなっています。時間にしたら数秒の事だったと思いますが、体感的には世界が止まってしまった位長く感じました。どうして私だけ別れちゃったんだろう。

「らつまらない」と、私が心に壁を作っていたのかもしれません。変な事を言っていたらどうしよう、会話が続きかないかもしれない、そう思って返事も素っ気なかったと思います。それでも気にせず私に声をかけ続けてくれた事がとても嬉しく思いました。「自分に出来る事、出来そうな事はがんばってみよう。どうしても無理なら帰ってきていいよ。」と言ってくれたお母さん、私と仲良くなりたいたいと思いつつも声をかけてくれた友達。そのおかげで真っ暗だった私の世界は日に日に明るくなりました。今はこのクラスで良かったと心から言えます。修学旅行が物凄く楽しみです。

行きたくない。このまま家に帰りたくない。そんな気持ちのまま教室へ行きました。

家に帰り、お母さんに朝からのことを話しましたが、悲しい気持ちが大き過ぎてあまり記憶に残っていませんでした。

「お友達がいない教室に行きたくない。」

そう言うとお母さんは、

「そっか、それは寂しいよね。じゃあ、新しいお友達を作る為に、自分から声をかけてみたらどうかな。」

と言いました。それでも声をかけるのが怖くて一歩が踏み出せず、自分の席で一日を過ごしました。みんなに楽しみだだった修学旅行も、全く行きたくない気持ちになっていました。そんな私を心配して、お母さんは、

「そんなに嫌なら帰って来ていいよ。」

と、言いました。その言葉を聞いて私は、心が少し楽になりました。

そんな日々を過ごしていると、少しずつ声をかけてくれる子も増えてきて、楽しく過ごせる日も出てきました。思い返すと、もっと前から声をかけてくれていたと思います。「仲良しのお友達がいないか